

特設コーナー② 富山の教育の発展に寄与した人々

国全体で教育制度が整えられる一方で、富山では地域の教育の発展のために尽力した人々がいました。教育者や篤志家の様々な活動によって、地域に教育が広がり、教育の質も高められてきました。このコーナーでは、そうした人々のなかから、藤井能三、馬場はる、南日恒太郎、蜷川龍夫の4人をご紹介します。



(個人蔵、高岡市立博物館提供)

ふじい のうそう 藤井 能三 弘化3年(1846)～大正2年(1913)

射水郡伏木村(現・高岡市)で、北前船の回船問屋能登屋の長男として生まれました。元治元年(1864)、18歳で家業を継いだのち、伏木港の近代化に尽力しました。

まずは地域の人々の啓蒙が必要であると考え、学校の設立費や当面の運営費を自費でまかなうこととし、小学校の設立を当時の新川県に願い出、明治6年(1873)2月、県内最初の伏木小学校を開校させました。この時、教師として慶應義塾出身の吉田五十穂を迎えています。さらにこの3年後には、女子のための小学校も開校させています。

明治8年には、三菱会社代理店となり伏木港に汽船を廻航させ、さらに北陸通船会社を設立しました。また、伏木港灯台や測候所を作り、明治26年には中越鉄道会社(現・JR城端線・氷見線)設立にも参画しました。明治24年には『伏木築港論』を著し、その中で、伏木港とロシアのウラジオストク港を結び、シベリア鉄道を利用したヨーロッパ諸国との貿易ルートの可能性に言及し、大型船が入港できるように伏木港と庄川の改修の必要性を訴えました。明治33年、ウラジオストク航路が開設され、大正2年(1913)には、伏木港は改修を終えました。能三は完成の半年前の大正2年4月に亡くなりました。



(馬場家所蔵、富山市教育委員会提供)

うまば はる 明治19年(1886)～昭和46年(1971)

下新川郡泊町(現・朝日町泊)の商家・小沢家に生まれました。明治35年(1902)に北前船の回船問屋であった東岩瀬町(現・富山市)の馬場家に嫁ぎましたが、大正8年(1919)に夫の道久が亡くなったため、家業の一切を取り仕切る立場となりました。

家業のかたわら教育などの社会事業にも情熱を傾け、大正12年(1923)には皇太子(のちの昭和天皇)の成婚奉祝記念として富山県に2度にわたり合計134万円の寄付を願い出、県立の7年制の旧制富山高等学校(現・富山大学の前身校の1つ)の創設に大きく貢献しました。また、初代校長・南日恒太郎からの要請もあり、明治時代の文豪ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の蔵書などをその遺族から買い受け、「ヘルン文庫」として開校の記念に同校へ寄贈しています。

昭和36年(1961)、女性として初めて富山市名誉市民に推挙され、昭和46年(1971)に亡くなりました。



(富山大学人文学部提供)

なんにち つねたろう 南日 恒太郎 明治4年(1871)～昭和3年(1928)

新川郡東長江村(現・富山市長江)に生まれた教育者・英学者です。

富山県尋常中学校(現・富山高等学校)で同期の南弘(官僚・政治家)や蟹江義丸(哲学者)らと学びましたが、眼病により中退しました。その後は、独学で国語、英語、英文学の研究を続け、明治26年(1893)、文部省の教員検定試験に合格しました。

正則英語学校、第三高等学校、学習院などで教鞭をとるとともに、『英文解釈法』(1905)、『和文英訳法』(1914)など多くの英語参考書を著しました。

大正12年(1923)、旧制富山高等学校が新設され、初代校長として迎えられました。なお、弟の田部隆次はラフカディオ・ハーン(小泉八雲)に学んだ英文学者で、遺族との親交が深かったことから、それが縁となり、馬場はるの寄付という形で、ハーンの蔵書を旧制富山高等学校で引き受けることになりました。昭和3年(1928)、岩瀬浜で生徒との遊泳中に亡くなりました。南日自身の蔵書の一部267冊が富山大学附属中央図書館に「南日文庫」として収蔵されています。



(富山大学人文学部提供)

にながわ たつお 蜷川 龍夫 明治9年(1876)～昭和16年(1941)

新川郡滑川町(現・滑川市)の称永寺に生まれた教育者・宗教家です。

東京帝国大学で漢文を専攻し、さらに同大大学院においてインド哲学を学びました。明治43年(1910)より、奈良女子高等師範学校教授として倫理学を講義しました。その後郷里に帰り、大正10年(1921)に富山県師範学校校長、昭和6年(1931)に旧制富山高等学校校長(3代目)と校長を歴任しました。

この間、人材の育成に尽力し、師範学校に実業補習学校教員養成所や専攻科を新設しました。旧制富山高等学校では、ヘルン文庫を収蔵する小泉八雲図書館や、氷見市蛇ヶ島に生物臨海実験所を創立しました。また、「北方教育」(生活綴方教育の流れの1つ)を主唱し、つねに新しい時代の教育を考え続けました。

『仏教倫理学』(1906)など12冊に及ぶ著書を残し、晩年は、東本願寺参務として教団運営にも携わり、昭和16年(1941)に亡くなりました。